論 說

オホセッカに就いて

A Natural History of the Pryer's Grass-Warbler,
Bradypterus pryeri pryeri (Seeböhm)

榎 山 徳 太 郎
Toku T. Momiyama

目	次
I. 緒 言.....	115
II. 研究史.....	116
III. 名 稱.....	121
IV. 形態と色彩.....	123
V. 測 定.....	124
VI. 分布と近似種.....	131
VII. 習 性.....	133
VIII. 飼 養.....	139
IX. 餘 談.....	140
X. 文 獻.....	140

I. 緒 言

オホセッカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm) は ウグヒス科 (Silviidae) に属し、我が國特有鳥の1つであつて、その亞種である *Bradypterus pryeri sinensis* Witherby の大陸に於ける分布と共に非常に狭範圍の地に限られてをることは、丁度コマホホジロ *Emberiza jankowskii* Taczanowski やキムネヒタキ *Muscicapula elisae* (Weigold) の分布に能く似てをる。猶ほ其の上蕃殖地が唯1箇所だけ發見されてゐたが、其處も戰時中増産資源獲得の聲に刺戟されてか開墾せられ、この國寶的小鳥の故郷も何百俵かの米と諸とに代へられてしまつた。

又 この鳥の採集數も殆んど其の全數が分明してをる程で、各所の所藏標本は總べて測定まで記録されてをると云つても過言ではない位に保存數が僅少である。それは各所にあつた僅數の標本が戰災に依り更に幾つか失はれ、現在では全世界を通じて20餘個殘存してをるに過ぎない。

以下 この種に就いて從來の記録と、筆者の新たに補足する形態に關する數項、生態の2—3 並びに新分布等に就いて述べることにする。

II. 研究史

初めて此の種が學界に發表されたのは文獻の初頭にある通り明治17年(1884)の“*Ibis*”誌上であるが、其の原記載に“*This is a most interesting addition to the fauna of Japan. The skin (No. P 5) was shot in Tokio, not very far from Yokohama.*”とあり、基産地の“*Tokio*”とあるのは勿論これは東京市(往時の)を指すのではなく、東京府を意味するものと覺える。すると多分當時は諸所に澤山の濕地帯のあつた六郷村か或は羽田村(現在は共に大田區に屬する)邊りであらう歟。此の邊で基型標本が1點、他に横濱附近の平沼¹⁾で2點、皆共に H. Pryer が採集したものであつて基型標本他1點は Seebohm の手許に、1點は大英博物館(自然科學部)に收められたが、前者も Seebohm 没後は同所に移管された筈である。(文獻 1, 2, 3, 4, 5, 6, 14 & 18)

第4標本は明治20年(1887)12月に“駿河國”で織田某(N. Oda)²⁾の採集した♀の1標本で³⁾帝國博物館所藏品(No. 193)であつたが關東大震災の時に烏有に歸したのは甚だ惜しい。(文獻 5, 14 & 18)

第5標品は翌21年(1888)4月に静岡で獲れ、松平頼孝子爵家から鷹司公爵家に移つた。併し此れは残念ながら1945年東京空爆の折の犠牲となり終つた。(文獻 4 & 18)

第6標品は明治28年(1895)12月21日に東京千住⁴⁾で田中安次郎が採集した1點で動物標本社⁵⁾より清棲幸保伯爵家所藏となつたが、此れも亦東京空爆の犠牲となつた⁶⁾。(文獻 5, 14 & 18)

第7標本は翌29年(1896)に東京府下王子⁷⁾で採集された♂1點⁸⁾で、東

- 1) 平沼は埋立後に横濱市に編入された。
- 2) 織田信徳(Nobunori Oda)氏であらう。(高島春雄氏示教)。
- 3) 飯島魁博士調査「東京帝國大學理學部動物學教室所藏品カード」への英文手記に據る。
- 4) 往時東京府下であつた此の採集地は恐らく現在の足立區千住縁町・同 橋戸町・同 關屋町邊であらう。(最前所が一番適合する)
- 5) 動物標本社は東京市神田區五軒町で米山米吉氏の獨立經營された都下有數の標本商(博物學雜誌の編輯發行もされた)であつたが關東大震災(1923)前に廢業された。
- 6) 清棲伯爵から直接に承つた(6. vii. 1947)。
- 7) 現在の北區豊島或は堀船町邊りに當る歟。
- 8) 採集月日と採集者の氏名とは分明でない。

大理學部動物學教室にあつたが、現在は山階鳥類研究所々藏品中にある。
(文獻 7, 10, 12, 14, 18 & 38)

第8標本は明治38年(1905)10月に“尾張”で採集の♂1點、これは“米山所有”として前出飯島博士の手記¹⁾にもあるが、其の後松平子爵が購入され更に應司公爵家に移管せられたが惜しいことに此れも空爆の1犠牲となつた。(文獻 18)

第9標本は明治44年(1911)2月10日に“東京千住マキノ谷”¹⁾で獲れた♀1點、これも松平子爵家より應司公爵家に移管されたものであるが矢張り同じ経路を辿つた。(文獻 18)

第10標は大正12年(1923)6月14日に熊谷三郎氏が宮城縣栗原郡若柳町の1原野である“南谷地”内で3—4羽飛翔してゐた種名不詳の小禽を撃つて其の中の1♂を入手し、初めて此の種であることが解つた。それから暫くの間は熊谷氏が珍藏してをられたが、現在は仙臺市の齋藤報恩會博物館に移管された。(文獻 14 & 21)

昭和6年(1931)12月に東京の北方に當る荒川放水路沿岸で♂1羽が生擒され、それを京極(高備)子爵が飼養されたが遂に落鳥し、後標本として残されたやうである。(文獻 18)

其の翌年(1932)2月7日頃に4羽(新倉)が、同じ年の11月には前同とあまり隔らぬ荒川沿岸で♀2羽が生擒されて何づれかの愛鳥家の手に渡つたが其の後の行方は解らない。(猶この前後—即ち1932—1933春に掛けて他に1—2羽獲れた模様であるが、此れも果して如何であるか斷言致し兼ねる)。

(文獻 18)

更に其の年の冬(1933)からは從來にない位に本種が獲れて方々の飼鳥家—と云つても主に京濱附近在住に過ぎない—が此れを飼はれたので其の飼養法や多少生態的のことなどが解つて來た。それで此の年の12月10日(?)に獲れた♂♀2羽から翌(1934)春に掛けて20—25羽が矢張り荒川放水路附近(主として埼玉縣下の新倉・戸田、板橋區の志村の邊り)で捕獲されて愛鳥家の許にも收まり、又標本蒐集者の方々を欣ばした。(此の年度には筆者も幸に3標品を入手することが出来た)。(文獻 18, 19 & 20)

其の後、9年度(1934—1935)も10年度(1935—1936)も共に春に這入つて

1) 此の“マキノヤ”といふ地名は地圖上には目附からない。併し此處は現在の足立區練町に屬するさうである。(宇田川龍男氏示教)

から若干数が捕獲され、又 11 年度(1936—1937)には昭和 12 年 1 月 1 日に、足立區本木町で須藤龜次郎の捕獲した♂ 2 羽と♀ 1 羽との活鳥を筆者は入手して飼養した位であるから、此の年も相當数が捕獲されたもの思はれる。丁度此の春 4 月 12 日に黒田博士は静岡縣駿東郡原町植田の下浮島沼で 3 羽を發見、此の中から♂ 1 羽を獲られた。(文獻 30)

これより以前、昭和 10 年(1935)の夏、仙臺鳥の會の竹谷彦藏氏が宮城縣宮城郡高砂村蒲生の部落に程近いナナキタ川河口の葦原に此の鳥かと思はれるものが蕃殖してゐるらしいことに氣づかれて何回も觀察に赴かれた。翌年(1936)の 8 月 9 日に當時の仙臺中央放送局放送部長の猪川城氏と同行觀察の折に遂に其の巢卵を發見されたのであつた。それから數日後には竹谷氏に據つて雛のある第 2 巢が見出された。(文獻 23, 24, 25, 26, 27 & 28)

昭和 12 年(1937)5 月 18 日には猪川・竹谷兩氏に據り、同じく仙臺市外蒲生で此の種を觀察された。(文獻 31)

翌 13 年の梅雨期には前記の蒲生の草原は霖雨の爲めに増水してオホセッカの蕃殖も全うし得なかつたやうに竹谷氏は報告してをられる。それでも水災前に 1 卵のある 1 巢を發見されたが此れは空しくなり、減水後 7 月 15 日に觀察あつた時は♂ 2 羽だけを目撃されたとある。(文獻 36)

太田春雄氏は“池田重榮氏が前から富士山麓浮島沼附近に居ると言つて居られるが、同様な環境の中川運河西方の濕地には居るに相違ないと思つてゐる。……”と記された。(文獻 37)筆者も嘗て“尾張”から報告のある第 8 標本は恐らく名古屋附近で獲れたものであらうと推測して居る處でもあるので、太田氏の示唆せられた言には非常に心強く覺える。

昭和 22 年(1947)3 月 25 日に千葉縣千葉郡津田沼町で獲れた♀の 1 標本を都下の某標本店を通じて筆者は入手した。これは直接捕獲者から聴くことが出来なかつたので此れ以上の委しい採集個所を識り得ないのは聊か残念ではあるが、前回の採集記録以來丁度 10 年目に再び廻り會ひ、且つ其れが新分布地であるといふことは欣快に堪えない。(文獻 43)

以下は實體上でなく、單に文獻の上に現はれた本種の既知分布に就いて検討して見よう。

先づ Seebohm の『日本帝國の鳥類』には “I only know of the existence of three skins of this species: the type and a second skin from the Pryer collection are in my possession; the third skin is in the British

Museum. All three were obtained by Mr. Pryer near Yokohama.”(l.c. p. 79)とあるが、これは原記載では基型標本は東京府下（京濱間の横濱寄りの）で獲れ他の標品が平沼で採集されたとしてあることは既出の通りである。尤も日本に未だ來遊したことの無い外人にとつては此の邊には總べてが、“near Yokohama”で片付けられて仕舞つても無理からぬ事とは思はれるが一應は説明して置く。(文獻 2)

岡田信利の『日本動物總目錄、有脊椎部』に“静岡近傍 横濱近傍”とあるのは、後所は前記 Seeböhm の著書に據られたものであらうが、前の静岡近傍の方は多分第4標本である帝國博物館所蔵の分(“駿河國”, N.Ota coll.)に従はれたものかと思はれる。(文獻 4)

小川三紀の『日本鳥類目錄』には單に“Tokyo, Yokohama”と丈けあるのは Seeböhm の原記載に據られたと見える。(文獻 6)

内田博士著『日本鳥類圖説』には“從來東京・横濱・尾張等にて數回採集せられたる事あるのみ。”と記し、更に“右の記載は明治 29 年東京府下王子にて採集せられたる動物學教室所蔵標本に依れるものなり。”とある。即ち同書には第1—第3, 第7, 第8の各標品の採集地を公表あつたものである。(文獻 7, 14 & 18)

Tring の Dr. Hartert は大英博物館所蔵の 3 標本を調べられたのは確かで、其の分布地を „Hondo, Japan (Yokohama, Tokyo).“ とある。

(文獻 8)

日本鳥學會編纂の『日本鳥類目錄』(内田博士擔當の分)には“Hab. Hondo(Yokohama, Tokyo, Owari).”とあつて從來の文獻以上の新産地はない。(文獻 9)

熊谷三郎氏と筆者との共編の“宮城縣産鳥類目錄”には該地方産として此の種の名を初めて掲げてある。これは同縣栗原郡の南谷地で獲れた第10標本に據つたものである。(文獻 13)

鳥學會の『日本鳥類目錄(改訂版)』では初版の分に唯“Rikuzen”1箇所だけか追加してゐるに過ぎない。(文獻 16)

黒田博士の『鳥類原色大圖説』には“本州(陸前・東京王子・千住・横濱・静岡・尾張)のみに發見せられ、既知の數 8 點程あるのみ。”とある。(文獻 17)

次いで同博士には『鳥』誌上に“日本特有オホセッカの採集記録”と題して從來の既成標本の個體數、採集地、標本の所在、或は飼鳥の飼養者等の詳細を

記された。此れに據つて東京市の北方の荒川沿岸に幾等かの新産地を識ることが出来た。(文獻 18)

大野義輝氏は「野鳥」誌上に此の種の習性と 1933—1934 兩年度の捕獲数とが稍と正確に挙げられてをられるが肝心の採集地名が何處にも見當らない。(文獻 20)

大淵博士は“東北地方採集鳥類目録，第 1 報”に其の分布地を挙げてをられるが，鳥學會の目録(改訂版)以上には何もない。(文獻 21)

昭和 11 年(1936)の夏，仙臺市外蒲生で本種の蕃殖の事實が確かめられると，猪川・竹谷・大淵・安曇の諸氏に據り，從來全く暗黒状態であつた産卵，育雛，其の他の生態學的の方面に曙光が見出された。併し其れ等の發表の主材料は竹谷氏の提供された分に據られたものと見られる。(文獻 24, 25, 27, 28 & 34)

下村氏の『原色野外鳥類圖譜』には此の種の分布地及び蕃殖地として“本州(宮城縣仙臺市附近にて蕃殖)。”とある。(文獻 38, p. 9)

山階博士は『日本の鳥類と其の生態』に熊谷氏の公表あつた既知分布地を其の儘轉載され，其の後に判明した荒川沿岸・宮城縣宮城郡高砂村・静岡縣浮島沼の 3 箇所を加へられた。猶測定表には“横濱・南谷地・王子・志村・尾久・尾張・千住・荒川”の各所を挙げてをられる。(i.e., pp. 133—135) 因に同書の種の分布に“基産地は神奈川縣横濱”(i.e., p. 131)とあるが此れは明らかに誤りである。(文獻 39)

日本鳥學會の『日本鳥類目録(改訂 3 版)』には“Hondo(Rikuzen(B.)Tokyo, Yokohama, Ukishimanuma, Shizuoka, Owari)”とあつて浮島沼と静岡とが前版に追加してあるが，浮島沼は比較的近年發見された地であるから新追加は當然であらうが，静岡を此の時まで載せずにした理由は果して那邊にありや了解に苦しむ。猶この目録には初版以來本種の基産地を“Yokohama, Japan”とあるけれども，原記載では明らかに“Tokio”であり，『日本帝國の鳥類』に従へば“near Yokohama”となるが(後者は勿論誤り。この最初の誤りは恐らく内田博士擔當の時と思はれるけれども，版を重ねても其の誤りを踏襲して居るのは如何であらう。前出の山階侯の基産地の誤りの基も恐らく此の目録に據られてのことであらうと思ふ。(文獻 9, 16 &

- 1) 前項黒田博士の文獻(18)などから大凡その地を荒川沿岸と推測し得られるが，本稿を見た丈けでは想像もつくまいと思ふ。

III. 名 稱

オホセッカと云ふ名に就いて黒田博士は次のやうに註記してをられる。“此和名は一寸調べた處では小川三紀氏の 1908 の目録(文獻 6)が最初に學界に發表のものらしい。之より前にあるか否か目下不詳。”(文獻 18) 併し此れは誤りで、既に飯島博士に據り“日本の鳥目録”の増補及び正誤に“*Ōsekka*”と出てをるのが學界には最初の發表である。猶ほ果して此の種であるか如何か保證の限りではないが『本朝群禽和名分類』¹⁾の遠之部に“オホセツカ”の名が出てをる。猶又“センニフ”と云ふ名も此の鳥かと思はれる。山階博士は“唯飼鳥捕獲者”がセツカやオホヨシキリなどを捕獲する爲めに張つた網には時々かゝつた事があるらしく、徳川時代の鳥の寫生圖に此の種と思はるゝものゝ圖を畫きて“センニフ”と記してあるものがある所を見ると、當時の人は此の鳥を知つて居たが、飼鳥として價值少き爲めに棄てゝ顧みなかつたものと思はれる。……”(文獻 39) 處が此の“センニフ”(或は“センニウ”)必ずしも此の種でない場合も多い。例を挙げると、

『喚子鳥』せんにう 大ききさゞいに大ぶり、毛色すゞめにうすし、せい高く尾ながし、尾のすゑに白き玉あり、さゑづりほそし、ふゆ出る、よはきるにてかいにくき鳥なり。

『飼鳥必用』せんにう 此鳥堺筋に澤山居鳥也、巢子にて來る也 尤親鳥も來るもの也、(下略)

『本朝群禽和名分類』の世之部(中略)センユウテウ センカ カヤクマリ 薩州 ウシヲヒ土州

以上のものは總べてセッカの方であつてオホセッカではない。即ち尾端に白色部のあることや、堺筋や土佐・薩摩などに産すると云ふ點が其れを裏書してゐる。

處が又、前出の『喚子鳥』の“せんにう”に直ぐ續けて“せつか”の項があるが、これには次の様に載せてある。

“せつか あがい 生あ壹匁五分、あをみ入、粉壹匁。

大ききさゞいによほど大きく、毛色せんにうに黒し、轉りほそく、せんにうに似たり、よはき類にて飼がたし。”

1) 小野蘭山稿本、享和3年(1803)癸亥之春。

これでは“せんにう”＝セッカ，“せつか”＝オホセッカ，となつて名前の上で混亂が起りさうであるが，併し事實上兩種であることは能く解つてをる。

このセンニフといふ字は色々書くが，其の中の“仙入”“仙遊鳥”などは當字と見るべきであらう。唯“先入”だけは其の習性から見て穿ち得た名だと思ふ。これは筆者の獨斷と見られるかも知れないが，人の近づくのを見ると疾く潜り入る，或は見るより先きに潜り入る‘これを約めて“先入”に當てる，といふ風に考へられないものであらうか。取捨は讀む人々に判斷に任せる。

併し現在ではセンニフといふ Generic name は仙入屬 *Locustella* に當てゝをり，又本種にはオホセッカを用ひてゐるから別に問題にもならぬと考へられる。

オホセッカといふ和名は飯島博士に據つて公表されたことは前述の通りであるが，これに當てる漢字が區々であつて，文獻の表題でも見られるやうに近頃は“大雪加”を用ふ場合が多い。處が筆者は此の字は成るべく使ひたくないと思ふ。それで其れに代るものとして“大雪下”を提唱する。これは大體セッカ *Cisticola juncidis brunniceps* (Temminck et Schlegel) その者に既に“雪加”といふ當字を使ふことを極力廢したく思ふからに他ならない。夏季蕃殖期に於けるセッカは空間を啼鳴しながら波狀飛行を續けることは既に一般に知れてをるが，冬寒に及ぶと茅叢の下部などの日向に寒風を避けて居るのが見られる。これが降雪の折や其の後などには茅叢の積雪の下に陽溜まりに能く見受けられる處である。斯様な譯で“雪下”といふ語は洵に相應しいと思ふが“雪加”では全然その意味を爲さないし，又他に理由があるとも思へない。オホセッカもセッカに似て大いなるものであるから此れを採用したい。

英語では此の種を Swamp-Warbler (又は Marsh-Warbler) といふ。従つて本亞種は Japanese Swamp-Warbler を當てる。又この類一般を總稱して Grass-Warbler といふので其の基型標本の採集者の名譽を尊重して Pryer's Marsh-Warbler 又は Pryer's Grass-Warbler と呼ばれる。

獨逸語でも矢張り Pryers Rohrsänger といひ，英語と殆ど同意語である。

佛蘭西語では La Lusciniole de Pryer を用ひて居る。

學名の邦譯は *Brad'yp't'er-us* の *bradús* = 遅い, 又は緩慢なる(希臘語), 英語の “slow” と同意語, *pteron* = 飛翔, 飛び方 或は飛翔力(希臘語), 英語の “wing” と同意語。即ち屬名は “飛翔力の鈍い” 又は “遅い飛び方をする” といふ意味であり, 種名の *pryeri* は往時横濱に來住, 鳥類及び蝶の採集に盡力され, 學界に多大の貢獻あつた英人 Harry Pryer に獻じたものである。

方言は殆ど識れてをらない。併し黒田博士に據れば静岡縣原町植田の下浮島沼では “カヤモグリ(セツカの方言チンチン)” とある。(文獻 30) これはホンの一部の人達の間で用ひられる俗稱に過ぎないであらう。

IV. 形態と色彩

全身凡そ 134—151 mm. (5.28—5.50 in. = 4.42—4.48 寸)。

額から上尾筒までの背面は黄褐色で, 黒色若しくは暗褐色の軸斑がある。この軸斑は頭上・背・肩には稍と廣く, 後頸・腰・上尾筒には狭い縦斑を示してゐる。(個體に據り頭上の軸斑の狭いもの, 或は上尾筒の長い羽毛に縦斑を缺くもの等がある。これは必ずしも頭上の軸斑の狭いものが, 上尾筒羽が無斑だとは限つてをらない。) 尾は凸尾で其の數は 12 枚。尾羽は淡い暗褐色で外瓣は黄褐。普通では單調であるが稀に微かな濃淡の横縞を見ることがある。初列風切と次列風切とは淡い暗褐色で外縁は黄褐色を呈し, 内瓣の縁は帶白褐色, 三列風切の内瓣の大半は黄褐色, 外瓣は黒色で黄褐色の外縁は先端は狭く基半部は廣い。初列雨覆は黄褐色, 大雨覆は黄褐色に黒色の軸斑があり, 中雨覆と小雨覆とは淡黄褐色を呈する。(個體に據り各雨覆に總べて軸斑を見るものもある。) 眼先は汚白色で其の儘眉線(稍と不明瞭)に續く。眼下部から耳羽は淡褐色。頭側と頸側とは帶黄淡褐色。腮・喉・胸・腹の各部分は帶微褐白色を呈し, 胸側と脇とは黄褐色, 下尾筒はバフ色である。夏羽は羽毛末端の磨滅に據つて軸斑は稍と淡色となるが寧ろ整然となり, 羽縁は多少黄色味を缺く(従つて僅かに赭味を増加する傾向がある¹⁾)。♀成鳥(冬鳥)は♂に比較して羽縁の黄色味が僅かに劣る傾向があるが個體に依り左程でないものもある。

鮮時の色彩²⁾ —虹彩は暗褐又は濃褐色。嘴は暗褐色, 嘴縁と下嘴の基半部

1) 宮城縣栗原郡若柳町南谷地にて大正 12 年 (1923) 8 月 14 日採集の ♀成鳥に據る。(文獻 14)

2) Soft parts(黒田博士の所謂 “柔軟部の色彩”)

とは角肉色か又は淡褐。跗蹠は角肉色か帶微紅淡褐色。趾は暗肉色で趾節部は暗色。爪は背部は淡蒼色で下縁は淡色である¹⁾。

幼鳥—幼羽。“頭部及び後頭部は錆褐色にて縦に數條の黒線あり、眉斑は淡黃褐色、腮及び喉部は淡黃白色、耳羽は縮のある黒褐色、背部は錆褐色にて黒色の縦斑あり、大雨覆は中央部黒色にて兩側は錆褐色、第一風切〔初列風切の意?〕は黒褐色、第二風切〔次列風切の意?〕は黒色にて兩側に細き錆褐色の縁あり、腿部は褐色、胸部及び腹部は全面帶黃褐色、跗蹠及び趾は全部赤黒褐色、爪は乳白淡黒色、尾羽は淡黒褐色。羽毛共にセツカより光澤が少い。”

雛—“セツカ雛より大形で（孵化後同日數を経過したものを觀察して見ると）、嘴の誤り?〕の根元の兩側はセツカの色よりも黄色が鮮かで、口腔の色彩も黄色であるが嘴根の色よりも鮮かでない。舌根の兩側にある小黑點はセツカのそれより小さい。”（竹谷彦藏氏は據る）（文獻 34）

小川弘太郎は此の種に就いて、“セツカに似て大形なり。尾羽は一樣に赤褐色にして斑紋等なし。セツカの尾羽は羽軸に沿へる部分黒色にして末端白ぬき裏面に幅廣き黒色の横條あるを以て一見して兩者を識別し得べし。”（明治 28 年 12 月 21 日、東京千佳産 1 標品に據る）（文獻 5）右の“尾羽は…赤褐色”とあるのは少し異色と思はれるが大體兩種の相違點を指摘し得てをる。

V. 測 定

從來 2—3 の鳥學書に出されてゐる本種の各部測定を次に轉載して見よう。（單位は耗）

個體數	翼長	尾長	跗蹠	露出嘴峯	全嘴峯	測定者
3 (♂ ♀)	51—58	51—57	—	—	12—13	Hartert ⁸⁾
1 ♂	57	—	17	—	12	内田 ¹²⁾
3 ♀	53—56	57—59	19—20	10	13	黒田 ¹⁷⁾
5 ♂ ♀	52—58	53—61	19—21	9.5—11	12—13.5	〃 ¹⁸⁾
1 ♂	61	63	20	10.5	14	〃 ³⁰⁾
10 (♂ ?)	58	59	20	10	—	中西 ³²⁾
3 ♂ ♂	55.5—56	57—60.5	20	11	—	山階 ⁴⁰⁾
1 ♀	55	59	20.5	11	—	

次に各個別の測定を表出する。

- 1) 鮮時の色彩は總べて黒田博士（文獻 30）・山階博士（文獻 39）並びに筆者の手記及び寫生帖に據る。

所 藏	番 號	採 集 地 (採集期)	性	翼長	尾長	跗蹠	中趾 爪共	露出 喙長	全喙長	第1初列 風切羽	測定者
Brit. Mus. (Nat. Hist.)	(Type) *	東京府下	♂ (♂ ?)	59	59	20.4	—	—	12.8	—	Seeborn ¹⁾
×帝室博物館	193	駿河國 xii. 1887	♀ (♀ ?)	53	57	19	18	10	—	—	飯島 ¹⁸⁾
×鷹司家舊藏	3521	尾張國 x. 1905	♂	58	61	21.5	18.5	10	1.3	18.5	黒田 ¹⁸⁾
×	3522	靜岡 iv. 1888	“♀”	57	56.5	19.5	17	11	13.3	18.5	“
×	3520	東京千佳マキノ谷 10. ii. 1911	♀	52	53	20	19.5	10	12.5	16.5	“
×黒田家舊藏	14326	東京荒川附近 xii. 1933	♀	52.5	55	19	17	9.5	12	18	“
×	—	靜岡縣浮島沼 12. iv. 1937	♂ ad.	61	63	20	18.5	10.5	14	19	“ 30)
東大理學部 動物學教室	49	東京王太子 1896	♂	57.5	59	20	18	10	13	16.5	“ 18)
山階鳥類研究所	20598	同生 1896	♂	56	59.5	21	—	11	—	—	山階
“	13747	東京板橋區志村 a 6. iii. 1934	♂	56	60.5	20	—	11	—	—	“
“	13748	同上 k 8. iii. 1934	♂	55.5	57	20	—	11	—	—	“
“	13749	同上 a 4. v. 1934	♀	55	59	20.5	—	11	—	—	“
“	27750	荒川放水路上流 23. ii. 1940	♂	51	6	21	—	10.5	—	—	“

* 基型標本は時で發表してあつたが、便宜上耗に換算して掲げた

所 藏	番 號	採 集 地 (採 集 期)	性	翼長	尾長	附蹠	中趾 爪共	露出 蹠峯	全蹠峯	第1初列 風切羽	測定者
齋藤報恩會 博物館	—	宮城縣栗原郡南谷地 -14. viii. '23	♂ ad.	56	52	17.5	—	10	—	—	熊谷 ¹⁰⁾
羶山鳥學研究所	34.0010	東京荒川區尾久町 a 1. ii. '34	“♀”	57	56.3	19.7	18.2	10.7	13.8	—	羶山
”	34.0015	同 上 a 17. ii. '34	♂	56	58	19.5	16.7	10.5	13.7	—	”
”	34.0016	同 上 a 21. ii. '34	♂	56.5	57.7	19.5	16.7	9.7	13	—	”
”	35.0040	東京王子區豐島 a End Jan., 1935	“♂”	53	54	19	16.5	9.5	12.3	—	”
”	35.0058	東京荒川區尾久町 a 23. iii. '35	♀	53.5	55	19	17	10	12.7	17.8	”
”	35.0166	同 上 a 14. ix. '35	♂	—	57	19.5	17.5	11	14	—	”
”	36.0151	東京足立區日之出町 a 21. ix. '36	♂	—	51+X	19	17	—	—	—	”
”	37.0008	東京足立區本木町6丁目 a 11. i. '37	♀	52	57.5	19.5	16	10	13	—	”
”	37.0073	同上 a 7. v. '37	♂	56.8	57.3	20.5	18.7	10.3	13.8	—	”
”	37.0150	同上 a 9. vii. '37	♂	57.5	60	20	—	10.5	14	—	”
”	37.0293	東京荒川區尾久 a 26. x. '37	♀ ad.	—	—	8.7	17.5	9.5	12.2	—	”
”	47.0001	千葉縣津田沼 25. iii. '31	♀ ad.	55	59.7	21	17.8	9.7	13	16.8	”
農林省獵政 調查課	4103	靜岡縣御前崎 12. xi. '31	◎ (♀?)	52	—	18.7	16.3	10	13	16.7	”

註記。所藏の欄に印×のある分は現品は既に失はれてをるもの。採集期日の前に y
或は k とあるのは其れは採集の月日ではなく、飼鳥であつたものが“落鳥”したり、
“他殺”された日である。

備考—上表中の東大理學部動物學教室所藏 No. 49 は後に山階鳥類研究所に移管さ
れて番號も新たに No. 26598 と改められたが、この兩時代の同一の標本を黒田・山階
兩博士に據つて測定あつた分を併載して置いた。兩者間に多少の測差が見られるので
何れを採用してよいか判斷もつき兼ねる儘に兩者共に掲げた次第である。猶 山階博
士測定の方は今回該研究所々藏標本測定原簿より轉寫さして頂いた分である。爰に同
博士にお禮を申上げる。

/次に筆者が嘗て黒田博士の御所望に據つて靱山鳥學研究所々藏標品 Reg. No.
34.0010 の測定をお報せしたが、この時は丁度飼ひ鳥が死んだ直後で現品は剥製々
作中であつた爲めに、活鳥の時の測定を其の儘お送りした。(文獻 18) 今回の分は標本
から測定したものであるから大分の隔りが見られる。勿論今回のものゝ方が正しい。

以上を綜合すると大體次の様になる。(測定上から性別の疑はしいものは
正して置いた。

調査數	翼 長	尾 長	跗 蹠	中趾爪共	露出嘴峯	全嘴峯	測定者
3(♂♀)	51—58	51—57	—	—	—	12—13	Hartert
4 ♂♀	57—61	56.5—63	19.5—21.5	17—18.5	10—11	13—14	} 黒田
2 ♀♀	52—52.5	53—57	19—20	17—19.5	9.5—10	12—12.5	
4 ♂♂	55—56	57—60.5	20—21	—	10.5—11	—	} 山階
1 ♀	55	59	20.5	—	11	—	
7 ♂♂	56—57.5	52—60	19.5—20.5	16.7—18.7	9.7—11	13—14	} 靱山
6 ♀♀	52—55	52—59.7	18.7—21	16—17.8	9.5—10	12.2—13	
♂♂	55—61	52—63	19.5—21.5	16.7—18.7	9.7—11	13—14	} 綜合
♀♀	51—55	51—59.7	18.7—21	16—19.5	9.5—11	12—13	

上表の中の最後の“綜合”とした分がオホセッカの測定の基準と見て差支
へあるまいと思ふ。

翼は大體圓味を帯びてをり、尾はセンニフ型で翼より長いのが常例である
が、時には反對に翼の方が長大である場合もあり(鷹司公爵家舊藏 No. 3522;
齋藤報恩會博物館所藏—熊谷氏採集の分;靱山鳥學研究所々藏 Reg. No.
34.0010, の各例), 甚だ稀には翼尾同長の例(Seeböhm 測長の Type speci-
men の例 1)もある 猶 Seeböhm は “its tail is shorter than the wing.”

* Dr. Hartert は基型標本も含めて測られたが、其れには “Flügel (3 Stück)
51—58, Schwanz 51—57, Schnabel (Culmen) 12 bis 13 mm” とあり、これに
據ると Type は尾長の方が短いやうだ。(文獻 8)

と云つてをるが(文獻 2), 同氏の原記載には “Length of wing 2.32, tail 2.32, tarsus .8, culmen .5 inch.” とあつて最初の發表は少し測り違ひをされたものと見える。即ち Dr. Hartert の測られた標品の中の一番大形の分(翼長 58; 尾長 57 mm.)が此の種の基型標本と認めて恐らく誤りのないものと思はれるから。

初列風切羽の第 1 羽は第 2 羽の略半分に等しい。第 2 羽は區々ではあるが第 8 羽と等しい場合(例—Reg. No. 34.0010), 第 8 羽と第 9 羽との中間の長さ(例—Reg. No. 35.0018), ¹⁾ 凡そ第 9 羽と同長(例—Reg. No. 35.0040, 獵政. No. 4163), ²⁾ 第 10 羽に殆ど等しい(例—Reg. Nos. 34.0016, 37.0008, 37.0150, 47.0001)²⁾ 等の各例がある。第 3 羽以下の翼式は各個體に就いて表出することにしよう。(次頁参照)

即ち第 3—4 羽最長の場合では翼式は,

a) $III = IV > V > VI > VII$

第 4 羽最長の場合には次の兩様があり,

b) $III < IV > V$, $III = V > VI > VII$ c) $III < IV < V$, VI , $III > V > VI < VII$

第 4—5 羽最長の場合には,

d) $III < IV = V > VI$, $III > VI > VII$

第 5 羽が最長である場合では²⁾,

e) $IV < V > VI$, $III = VI > VII$

等の各様式がある。

尾羽の数は 12 枚で, 尾形は凸尾ではあるが外側羽が著しく短かい爲めに其れを開張すると全體として圓尾或は團羽形とも見られる。それは中央尾 2 羽對が僅かに 2 耗羽だけ長いと云ふ點に起因する。

下尾筒は非常に長くて尾長の $\frac{2}{3}$ 位に及んでゐるので最短尾羽の方が却つて短かく其の下に隠れる。従つて最長尾羽(中央羽)と最短尾羽(最外側羽)との差は筆者自測の分は♂♂ 25.0—29.0 mm., 4 ♀♀ 23.0—26.5 mm. あるが, 黒田博士が示された處に據ると “22.5(♀)—25(♂)(東大標本の例)—26 耗(静岡の例—飯島博士による)もある”。(文獻 18) 筆者の測つた方が差長が大きいが此れは決して最外側羽の換羽中のものではなく十分に伸び切つた

1) 黒田博士の實驗例もある(文獻 18, p. 226)。

2) 山階博士も此の例を報告あつた(文獻 40, p. 131)。

登録番號	性別	採集地	採集期	落鳥年月日	翼式	最長最短尾羽の差
(獵政. 4163)	♀	静岡縣榛原郡御前崎燈臺	12. xi. '31	—	$\text{I} < \text{IV} < \text{V}, \text{II} = \text{V} > \text{VI}$	—
31.0010	“♀” = ♂!	東京荒川區尾久町	26—7. xii. 1933	1. ii. '34	$\text{I} < \text{IV} < \text{V}, \text{II} < \text{V} > \text{VI}$	—
34.0015	♂	同上	“	17. ii. '34	$\text{I} < \text{IV} > \text{V}, \text{II} = \text{V} > \text{VI}$	29.2
34.0016	♂	同上	“	21. ii. '34	$\text{I}, \text{II} < \text{IV} < \text{V} > \text{VI}, \text{III} > \text{VI}$ $\text{I}, \text{II} < \text{IV} = \text{V} > \text{VI}, \text{III} > \text{VI}$	25.0
37.0073	♂	東京足立區本木町6丁目	i. 1937	7. v. '37	(換羽中)	23.0
37.0150	♂	同上	“	9. vii. '34	$\text{II} = \text{IV} > \text{V} > \text{VI}$	29.0
35.0040	“♂” = ♀!	東京王子區豐島	i. 1935	End Jan. 1935	$\text{I} < \text{IV} = \text{V} > \text{VI}, \text{II} > \text{VI}$	23.3
35.0058	♀	東京荒川區尾久町	Early Feb. 1935	23. iii. '35	$\text{I} < \text{IV} > \text{V}, \text{II} = \text{V} > \text{VI}$	23.0
37.0008	♀	東京足立區本木町6丁目	i. i. '37	11. i. '37	$\text{I} < \text{IV} > \text{V} > \text{VI}, \text{II} = \text{V} > \text{VI}$	23.4
47.0001	♂ ad.	千葉縣千葉郡津田沼町	25. iii. '47	—	$\text{II} = \text{IV} > \text{V} > \text{VI}$	23.5

標品であるから其の差長は信頼しても誤りない。この差長に就いても♂の方が♀よりも長大であらうことは推斷し得られる。

北中支産の近似亞種にヲナガオホセッカ¹⁾ *Bradypterus pryeri sinensis* (Witherby) といふのがある。これはオホセッカに比べると上面は黄色味が劣り、下面も亦白味勝ちである。其の上 尾羽が一般に長い。新和名もそれに據つて附けられた譯である。

此の亞種は測定上から見ると、翼長は大差はないが、尾長に於ては優り、跗蹠の長さとは平均上劣小である。

次に兩亞種の測定を併出して見よう。

亞種名	性別	翼長	尾長	跗蹠	露出嘴峯
<i>pryeri</i> .	♂♂	55—61	52—53	19.5—21.5	9.7—11
	♀♀	51—55	51—59.7	18.7—21	9.5—11
<i>sinensis</i> .	♂♂	55—61.5	61.5—63	19—20	8—10 ²⁾
	♀♀	50—56	53—58	18—19	

又 翼式は La Touche に據れば “First primary somewhat less than half of 2nd ; 2nd between 8th and 10th ; 3rd, 4th, and 5th longest and almost equal, the 4th being a shade longer, and the 5th from one to half a millimetre shorter. There is a slight variation of about half a millimetre in the proportions of the 3rd, 4th, and 5th primaries.” とあるから、基亞種のオホセッカの翼式と大體同様であらう。又 同亞種の尾羽に就いて同氏は次の様に記してをられる。“tail much graduated, the outermost pair about 28 mm. shorter than central rectrices and concealed by under tail-coverts.”²⁾ これに據ると長短尾羽の差長を唯 28 mm とだけ載せられてあるに過ぎないけれど、此れが平均値とすれば基亞種に比べて大差が見られる譯である。併し筆者は其れ程でもないものだと思つてゐる。それは多分同氏が調査した個體が偶々比率の大きいものであつて、他の分は脱羽か或は缺損かで完全に測長され難かつたのであらう。(實際此の種の外側尾羽は缺損して居ることが多いのと、同氏が數多くに就いて測られたのならば “variation limit” を出された筈であらうと想像されるから)。併しながら此の亞種の方が尾羽の長い點から、尾羽の差長も亦大きいで

1) 尾長大雪下(新稱), 英名 Chinese Swamp- or Marsh-Warbler.

2) La Touche, J. D. D.: A Handbook of the Birds of Eastern China, I, pt. 3, p. 229, May 1926.

あらうことは推測し得る。

VI. 分布と近似種

オホセッカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm) は未だ本州以外の土地で獲れたことは全く無く、然も從來識れてをるのは恐らくは其の一局部に過ぎないと思はれる地方であつて、其れ等を東北から西南の順に列べると次のやうになる¹⁾。

1. 宮城縣(陸前)栗原郡若柳町南谷地(熊谷, 14/viii)。
2. 宮城縣(陸前)宮城郡高砂村蒲生南下河原草原(竹谷, vii—viii; 猪川, 9/viii; 大淵, viii; 安曇, early/June—end/August)。
3. 埼玉縣北足立郡戸田町戸田荒川堤防外²⁾(黒田)。
4. 埼玉縣北足立郡新倉村下新倉荒川堤防外(黒田, 7(?)/ii)。
5. 東京都板橋區志村舊荒川沿岸(黒田)。
6. 東京都北區豐島³⁾(糺山—新報告)。
7. 東京都足立區本木町舊荒川堤外=尾久町對岸(黒田; 糺山, 1/i)。
8. 東京都荒川區尾久町荒川沿岸(糺山—新報告, xii, i, ii & iii)。
9. 東京都足立區千住(綠町?)=舊東京府南足立郡千住(小川, 21/xii)。
10. 東京都足立區綠町=舊東京府南足立郡千住マキノ谷(黒田, 10/ii)。
11. 東京都足立區日之出町荒川放水路堤外(糺山—新報告, 10/iv)。
12. 千葉縣(下總)千葉郡津田沼町(糺山, 25/iii)。
13. 東京都大田區(?)=舊東京府荏原郡(基產地)(Seeböhm)。
14. 横濱市神奈川區平沼町(?)=舊神奈川縣(武藏)橋樹郡神奈川町の平沼⁴⁾(Seeböhm)。
15. 静岡縣(駿河)駿東郡原町植田の下浮島沼(黒田, 12/iv)。
16. 静岡縣(駿河)静岡近傍(岡田信利; 飯島, xii⁵⁾; 黒田, iv⁶⁾)。
17. 静岡縣(遠江)榛原郡御前崎燈臺(糺山—, 12/xi)。

1) 人名は報告者、月別は採集期。

2) 堤防外とは河流のある方を指す。

3) “東京府下王子”とある第7標本は恐らく現在の此の北區豐島(以前の王子豐島町)か又は隣接の堀船町邊りの産と思はれる。

4) 平沼は埋立後に横濱市に編入され、現在の北幸町・南幸町・岡野町・平沼町西・平沼町。

5) 文獻にはないが同博士の調査カードにある。

6) “静岡”とあるが恐らく其の頃の静岡市外であらう、それは多分“安倍郡安倍川原”邊と思はれる。

18. 愛知縣(尾張)—地名の詳細不明(飯島, x⁹; 黒田, x)。

以上 18 ケ所の他に未だ採集地があるかも知れないが筆者は寡聞で此れ以外の分に就いては識る處がない。

これに據ると從來の最北の記録は宮城縣栗原郡若柳町の南谷地(北緯 38° 45'; 東經 141° 10')で、最南は今回の新報告である静岡縣榛原郡御前崎村の御前崎燈臺(北緯 34' 東經 138° 17')となる。最西の“尾張”とある分を、名古屋市西南郊の中川・荒子川・庄内川・蟹江川・筏川等の河口部邊と見ると北緯 35° 5'; 東經 136° 45'—53' となる。此れ等は推定の限度であるけれど大體に於て大差はないと思ふ。猶 各既知分布地の中間に介在する“棲息好適”と見られる濕原地を搜したならば未だ未だ新分布地を見出すことも出来ようと考えられる。

春秋兩季(3—4 月と 10 月)に河北省秦皇島附近を通過して、湖北省の漢口附近に越冬するヲナガオホセッカ *Bradypterus pryeri sinensis* (Witherby) の蕃殖地は未だ解つてをらないが、多分滿洲であらうと云ふことになつて居る。恐らく此れは誤りないことで、筆者は河北省境から餘り遠く隔つて居らない南滿洲の濕地帶で蕃殖するものと目して居る。其れは基亞種に於ける移動範圍が北緯約 39° から 34° の間に限局されてをると云ふ點から斯様に思はれるのである。

附記—Dr. Hartert に據れば *Bradypterus pryeri* は *Tribura* 群 (*thoracica*, *taczanowskii*, *major*, *luteoventris*) に容れるべきだと云ふが、La Touche は此の意見に注意は拂ふが率直には請入れ兼ねるとある。(La Touche, l. c., p. 230) 筆者は *B. pryeri* だけは眞正の *Bradypterus* 屬と、*Tribura* 屬との中間に位置するもの (*Tribura* 屬の亞屬として) と思ふ。即ち、

(1) 初列風切第 1 羽は第 2 羽の半ばに等しい (或は半ばより僅かに短い)。

(2) 初列風切第 2 羽は次列風切より僅かに長いか、又は等しいか、或は僅かに短い。

(3) 尾羽は比較的に細長である。

(4) 嘴基部には短かいながら明らかに鬚毛がある。

(5) 背面には縦斑がある。

(6) 卵殻は白色無斑である。

VII. 習 性

元來此の種は非常に稀有なものと 思はれてをつて、其の標本さへ 1931 年以前には入手至難とされてゐた。處が偶々東京の北方に當る荒川放水路の附近で昭和 6 年(1931)の暮に久し振り(東京附近で 1911 來以來 20 箇年振り)で活鳥 1 羽が捕擒され、それから引續いて數年間(1931—1937)に互つて同所附近で捕鳥業者に據り 40 餘羽は捕られたであらう。此れ等から從來殆ど闇冥に近かつた此の種の習性の一端が識れ始め、更に昭和 10 年(1935)の夏以來宮城縣仙臺市外蒲生で觀察續行中の竹谷彥藏氏に據つて、翌 11 年 8 月に巢卵雛と引續いて發見される處となり、これで初めて此の種の生態學的方面が開拓されて來た次第だ。

大陸方面では亞種であるヲナガオホセッカが北支の秦皇島で 1911 年 4 月に La Touche に據り初めて發見された時は未だ學名の方が附かず、翌 1912 年 3 月に中支の漢口で Captain Hubert Lynes (後の Rear-Admiral H. Lynes)が採集したものを H.F. Witherby が其の年の 11 月 13 日に開催された英國鳥學者俱樂部の會合で學界に發表したので初めて近似亞種が目附かつた譯である。この席上で Capt. Lynes も漢口地方に於ける野外觀察の 1 部を話されたのは一般の興味を引いた。更に引續いて Ogilvie-Grant は此の新亞種は嘗て La Touche に據つて 1911 年の 4 月と 10 月に秦皇島で 3 回獲られ(前項と多少重複するが)、オホセッカと同一視されてゐたが、これは撤回しなければならぬこと等を披露あつた²⁾。この支那産の亞種の方は蕃殖に關しては未識であるが、他の生態學的の方面は基亞種であるオホセッカより既に 20 餘年前から識れてゐたといふのも面白い。(亞種の發見は 28 年程遅れてゐながらも)

これ等 兩亞種の生態學的の報告を年代順に載せ、後に綜合的に習性に就いて述べる。

2) Ogilvie-Grant, W. R.: Remarks on *Luscinola pryeri sinensis*. Bull. B. O. C., vol. xxxi, no. 182, p. 13, Nov. 29, 1912.

Lynes, Capt. H. : Remarks on *Luscinola pryori sinensis*. Bull. B. O. C., vol. xxxi, no. 182. p. 12, Nov. 29, 1912. La Touche, J. D. D. : *Luscinola Pryori sinensis* Witherby. "Notes on the Birds of North-East Coihli, in North China." Ibis, 11th ser., vol. ii, nh. 3, pp. 654—656, July 1, 1920. ; —*Bradypterus pryori sinensis* (Witherby). Handook of the Birds of Eastorn China, I. pt. 3, pp. 229—230, May 1926. ; 熊谷三郎 1928 ; 黒田長禮, 1933, 1934 ; 大野義輝, 1934 ; 中西悟堂, 1936 ; 猪川珣, 1936 ; 竹谷彦藏, 1936 ; 大淵眞龍, 1936 ; 安曇惣四郎, 1937 ; 竹谷彦藏, 1937 ; 中西悟堂, 1938 ; 竹谷彦藏, 1938 ; 下村兼史, 1938 ; 山階芳麿, 1941 ; 楢原勉, 1941. (表題の無い分は文献参照)

此の鳥は年中水中に浸つて居る様な草生地を好んで棲み、殊に海岸から餘り遠くない(但し海水の必要はないらしい)低地でヒラキ *Juncus balticus* Willd., var. *japonicus* Buch. ; キ *Juncus effusus* L., var. *decipiens* Buch. ; カモノハシ *Ischaemum crassipes* Nakai ; ヨシ *Phragmites longivalvis* Steud. 等の藨科或は禾本科植物が密生し、泥深く中々中に近づき難いやうな濕潤地を特に好むものと見受けられる。(文献 44 & 45)

東北地方一宮城縣下では正しく夏鳥であつて蕃殖を了ると南暖の地方(それも餘り遠隔の地ではないらしい)に移行する。東京附近一主として荒川の沿岸及び荒川放水路堤外の蘆荻密生地では11月(下旬頃?)から4月上旬までの間に捕獲されてをるから、此の間には越冬してゐる鳥も確かにある。併し同じ東京附近でも多摩川原下丸子邊で9月7日に此の種と思はれるものが出現してゐる處を見ると(文献 41), 案外“燈臺下暗し”で近か間で蕃殖してをるかも知れない。現に静岡縣原町植田下浮島沼で4月12日に採集された18鳥は蜀黍粒大の Testis が檢られたから恐らく此く地附近で蕃殖するのであらうと採集者は推測されてをられる。(文献 30) 嘗て“尾張國”で10月に獲れたもの1標品は此の地から餘り遠くない方面に蕃殖地があると見た方が當つてをりはしないだらうか。

以下 本種の唯一の蕃殖地である宮城縣宮城郡高砂村蒲生に於て竹谷氏の貴重な觀察を骨子として其の生態學的の各項を纏め上げることとする。

蒲生の蕃殖地に昭和12年(1937)の5月18日には既に此の種は到着してをつたといふから、渡來期は5月上旬から中旬で、此の頃は草原の草本も未だ十分に成長してをらないので、麥畠の中を一時假の棲所とし下旬頃から草原

に轉住する。渡去期の方は確としたことは解つてはをらないけれど大凡10月下旬乃至11月上旬頃であらう。(文獻 31・& 35, p. 914)

冬間の棲所は低い雜草の立枯れの澤山にある水湿地で、勿論ヨシ等の刈殘して豊富にある箇所であり、キやヒラキなどが重なり合つて倒れてゐる下などに見られることが多い。そして此の頃は鳥自身が危険を感じない以上、殆ど飛ぶことがなく單に草から草へ、小枝から小枝へと躍動して行くに過ぎない。セッカも亦此の種と同様の地形の場所に棲息してゐるが、彼の種は追はれた時は高く遠飛びして直ぐ近くには降りることがないけれど、本種は直下から飛び出した場合でも近い時は3 m. 位で降り、再度追ふ時は下降場所の上まで近づいても中々飛び出さぬことさえある。最も遠飛びををするとしても200 m. を超すことは絶無と云つても過言ではない。飛翔力は非常に弱く、遠飛びをした直後に近寄つて見ると疲勞の極に近いらしく、意外に近づくことが出来、場合に據つては空手で此れを抑へる様な場面に至る事さえある。下降箇所は大抵叢間であるが小灌木の根本にも棲むこともある。飛び方はセッカの波狀飛行とは全く相違し、地面に平行し直線狀、高度は30 cm. 以上1 m. 超へることがない。此の時の形は尾羽を擴げて心持ち下げ氣味として居るが、其の態は丁度アリスヒ *Jynx torquilla japonica* (Bonaparte) の飛翔に共通點が多分にある。(文獻 20) 夜間の就眠場所(所謂 塙)は大體晝間の棲息場所と大差なく水邊の蘆荻茂林中に限るやうである。そして高度は判然としないが恐らく晝間の行動の範圍一即ち水面近くから1 m. 位までの間であらう。

蕃殖期に於ける生態を竹谷氏に據れば、“親は常に葎の疎なる草叢に棲息し、時々巢の附近に飛來する。草叢を潛行しつゝ餌を漁る。飛翔狀態はヒバリの如く羽(翼の誤り?)を動かし尾羽を下げて轉り乍ら草の尖端或は中間より1—3 m. 位の高さまで垂直に又拋物線を描いて飛び、時々草の尖端すれすれに又 $1\frac{1}{2}$ m. 位の高度を保ちつつ20—50 m. 位直線に飛ぶ事もある。草本に止り轉るが飛揚り轉る事が多く、飛揚る時は轉り下降する時は轉らない。”

“轉りは濁音でデュグ、デュグと4—10回位迄連續して緩かに、又最初低音でクルルルウと2—3回鳴き、後に連續してデュヂク、デュヂクと少し早

1) 屬名の *Bradypterus* = “slow-wing” は適名であらう。

口に、草本に止りヂュヂイロ、ヂュヂイロと1鎖り極めて緩かに鳴く等である。警戒・驚愕の鳴聲は♀のものと同じであるが、少しそれより強い。地鳴も亦♀と同じでそれより少し鋭い。

“親♀は體形より小さい。常に草叢に在つてゐる如く高く飛翔しない。雛に給餌の時又は給餌を終へて巢を離る時は草の先端とすれすれに飛ぶが稀に葭の上 $1\frac{1}{2}$ m. 位の高さで20 m. 位飛ぶ時もある。(中略)抱卵・育雛中は人を恐れず1 m. 位まで接近し得られる。又撮影もブラインドを要しない程度で、寫眞機を剥出しにして撮影中も不斷と變る事なく雛に給餌する。鳴聲はヂュッ、ヂュッとウグヒスの地鳴より低い濁音で、警戒と驚愕の鳴聲はピッピッ、ピックルルウと鳴きその音は低くもに冴えない”。(文獻 3, pp. 912—913)

“オホセッカの巢は藺科植物(主としてヒラキ)と禾本科植物の繁茂する場所にて殊にヒラキ *Juncus baliicus* Willd., var. *japonicus* Buch. の密生せる個所を選び営まれる。其の構巢に干渉するは♀のみなるか又♂も共にするかは本観察にては判明しなかつたが今後の調査を俟つ事にする。

巢は地上27—35 cm. の直立せる草本に構へられ、外廓とその内部にある産座とより成る。其の全形は橢圓形で産座は普通の碗形である。巢の長徑18—20 cm., 短徑は9—10 cm. 外廓の上部に在る巢口は極めて小さく一見判斷に苦しむ位で3—4 cm. 位である。巢口は2例共西南である。

構巢材料。外廓に使用されるは自然生のヒラキの生草と立草で、産座は附近にある禾本科植物の枯莖・枯葉と羽毛と獸毛とである。

構巢順序。ヒラキ・カモノハシの直立せるものを地上27—37 cm. の個所より折曲げ巢底を造り、其の上に外部は太・細不揃の禾本科植物の枯莖・枯葉を使用し、内部は細い禾本科植物の枯莖・枯葉と少數の羽毛・獸毛を使用した碗形の産座を造る。其の次に周圍に直立せるヒラキの立枯を折曲げ、表面には生草を折曲げ恰も蛇籠の目の様に編むかと思はれる様な状態に丸味を帯びたものを造る。此の構巢順序はその巢の間近にある未完の儘放棄したる巢と思はるるものを調査した結果であるが、尙觀察に不充分な點あるにより今後の調査に依て發表する。此の巢の放棄に就いても多少の疑念を持つものであるが、本觀察に於いて産卵せる巢の極めて近き場所に2ヶ宛發見したので此の鳥の仕業である事は推定に難くない。又此の草原にはヒクキナ・バン・ヒメクキナ等が蕃殖してゐるが、構巢に於いてオホセッカと全然相違してゐるの

で、此の放棄したる巢はオホセッカの巢と共通した點が見受けられる。この草原に蕃殖するセッカも1ヶの巢を完成するには幾何かの未完の巢を放棄するを見るが、オホセッカも此の共通した習性を持つ事は興味ある問題である”。

“卵の大きさは大體 19×14 mm., 重量は1 g 強, 色彩は白色で無斑, 形は丸みを帯びた橢圓形で兩端は相反して銳角; 鈍角である。1巢の卵數は5—6箇である。”(文獻 35, pp. 837—839)

猶 1936 年 8 月 9 日, 竹谷・猪川兩氏が發見されたオホセッカ卵としては學界最初の記録である1腹5卵の測定を次に掲げて置く。

I.	18×14 mm.	0.4 匁	IV.	19.5×14 mm.	0.4 匁
II.	18.5×14.5 mm.	0.38 匁	V.	19.5×14 mm.	0.24 匁
III.	19×14.5 mm.	0.3 匁	平均	18.9×14.2 mm.	0.35 匁

(猪川氏の測定に拠る)

右の中の(I)は無精卵で遂に孵化せず, 他の卵は8月19日に孵化したと云ふ。(文獻 24 & 28)

“抱卵・育雛には親♀だけで(中略)雛に給與する蟲類は螟蛾類・ヨシの葉卷蟲(或種の螟蛾の幼蟲)・イネノハマキ・コバネイナゴ及びハネナガイナゴの幼蟲・蜘蛛類等である。其の給餌時間は孵化直後2—9分, 孵化後6—10日には8—12分, 巢立直前は5—10分である。”(文獻 35, p. 912)

“孵化後13—14日にして巢を離れ草叢に在つて親♀より餌を給與せらる。啼聲は低くシー, シーと聞える。巢立したる雛は10日位經過して獨りで餌を捕食する幼鳥は概ね葭林内に棲息し, 飛翔自由となる頃は水田に來り餌を求むるを見る。人は容易に1 m. 位迄の近距離に接近する事が出來て, 親鳥よりも人を恐れず, 低く囀鳴す。草叢に潛行するのみで高く飛ばない。捕食する蟲類はヨシの葉卷蟲・或種の螟蛾・イネノハマキムシ・イナゴの幼生等である。”(文獻 35, pp. 840 & 910)

“親♂は抱卵・育雛に干渉しないが幼鳥の保護警戒の任に當る。”

“本觀察中に♂1羽♀2羽の親鳥で蕃殖して居つた。♂は交互に2箇の巢の近くに現れるが, 常に其の中間に居り追ひ出す時は最初發見した巢の附近に飛降りる。又其れを追出すと必ず後に後に發見した巢の附近に飛降りる。此の事は獨りオホセッカのみでなくコヨシキリ・セツカの蕃殖に於ても觀察して居るか此の草原にも毎年2—3の例を見る。……”(文獻 35, pp. 912—913)

目下の處、オホセツカの唯一の蕃殖地である蒲生字南下河原の草原は、餘程この種の蕃殖地として適合して居るらしく、竹谷氏が蒲生を中心として海岸附近に濕潤地の草原を、南は江戸濱から北は葛蒲田に至る約6 km. に亘る地域を調査されたが、他に此の鳥の蕃殖して居るらしい形跡も認められなかつたといふから蕃殖好適地は甚だ少ないものと見なければならぬ。(文獻 35, p. 917)

蒲生字南下河原の蕃殖地の環境は“冠川〔七北田川の異名〕の南岸は概ね葭の密生せる濕潤地である。蕃殖地の東の部分は濕潤の低地で降雨の際は一面に水浸しとなる。西部は畑地と水田に接續した乾燥地、南部は濕潤の地と乾燥の地と相半ばして灌漑溝を隔てゝ堤防があり、北部は冠川に沿うて濕潤の地である。中央部は割合に高い。此の草原にある植物中ヨシが最も多く冠川沿岸部分はよく密生繁茂し、高さ3 m. 位に達するが、他の部分は密生してゐる所は少い。此の葭の疎林の中にカモノハシ・オホアブラススキ・ヨモギ・ウシノシベイ等が混生して居り、濕潤地にはヒラキが一面間隙無き迄に密生して居り、其の中丈高いカタノハシやヨシが表面を半ば蔽うて居る。センダイハギ・チガヤ・クルマユリ等も所々に生育して春夏共に美觀を呈してゐる。クロマツが中央部に5本停立して大型の鳥類の休息所となり、又散在せるハンノキの灌木は小型の鳥類の休息所である。”(文獻 35, pp. 834—836)猶この草原に蕃殖する鳥類はオホセツカ以外にオホヨシキリ・コヨシキリ・セツカ・ホホアカ・ヒメクヒナ・ヒクヒナ・バン・ヨシゴキ・オホヨシゴキ・カルガモ等であるが、オホヨシキリの巢内へ托卵するためにクワクコウも盛んに出現する。此の中で數の順から云ふとコヨシキリ・オホヨシゴキ・オホヨシキリ・ヨシゴキ・セツカとなる。(文獻 35, pp. 836 & 916) 鶯科に屬する類似の兩種と共に其の蕃殖状態を比較して見ると、營巢地はコヨシキリ・セツカ・オホセツカ3種共に低地の草原で水邊に接近した地を選ぶのが普通である。(但し此れは蒲生附近の場合をいふ。他の2種は關東地方以南では高原地帯での蕃殖例は多々ある。) セツカは濕潤地でも乾燥地でも關はらずに唯禾本科植物に構巢、オホセツカは濕潤地に限局して藺科植物に構巢し、コヨシキリは地形も植物もあまり選り好みせず構巢する。(竹谷, 1937, p. 520) 併しながら構巢個所の高度を相違してオホセツカ 30—35 cm.; セツカ 40—60 cm.; コヨシキリ 80—188 cm, となり、本種は最低部位を占める。(文獻 35, p. 917)

産卵と育雛は恐らく年2回と見て誤りない處であらう。併じ此の鳥の蕃殖

地として見られる地域は低地帯の濕潤地であるために、雨量の多い時は冠水する率も、山地帯・低山帯・山麓帯などに比べて遙かに高いものと見なければならぬまい。此れ等が蕃殖に重大な影響を及ぼすといふことは敢へて説明を要しないと思ふ。従つて蕃殖期の最中に降雨多量の場合は其の結果が皆無といふ羽目に立ち至ることも無論あるに違ひない。又、此の鳥は飛翔力が弱く、運動も比較的の不活潑であるために、外敵の襲撃を受ける場合も他鳥に比べて多いであらうことは想像される。更に又、蕃殖好適地が水田或は養魚池と變じつゝある現今の有様では、此の儘何等の方法も講じないで置いたなら遠からぬ中に此の貴重な本邦特有鳥が絶滅の悲運に到達するであらう。洵に憂慮寒心に堪へない。爰に録して江湖の諸彦に訴へる次第である。

VIII. 飼 養

羽色も地味で觀鳥としての價值は無いし、其の轉聲も大して面白くもない。それに先づ難鳥りの方に屬するので、此の鳥を永く飼ひ通してゐる人は今の處あるまいと思ふ。

籠飼ひにする場合は、兎角に比較的長い尾を摩り易いから、容器は竹製の播餌籠の尺一(1尺1寸×6寸)位のがよい。“鷓鴣籠”の様に糞落しの一部が無くて籠盆に砂の敷けるものなら鳥の健康上一層よろしい。但し此の鳥には壺巢は與へない方がよい。(夜間壺巢に出這入りすると肝心な尾を摩つて見映えが無くなるから。)

播餌は強餌の方で同返し以下では到底飼ひ通すことは六ヶ敷い。山階博士は次の様に記してをられる。“餌は同返三分位の非常な強餌を用ひ、其の上時々蟲を與へた。之れ位の強餌ならば頗る健康であるが、少しく弱餌にすると直ちに衰弱する様に見えた。天氣よき午前中は盛んに轉つた。猶ほ下を歩く際は他種の如く跳躍する事なく、兩脚を交互に動かして歩行した。”(文獻40, p. 137)

筆者は小流れのある比較的廣い露天禽舎に入れて飼養してみたが、屋根の差し掛けてある小舎の一部の暗所にある低い枝に止る時の他は大抵流れの縁のコンクリートの上を兩脚を小忠實に動かして丁度ハツカネズミの様に小走りに往き來して居ることが多かつた。これは多分水流の中に葭株の根ツ子でも與へたら、其の方を喜んで其處に居附いてをつたかとも思ふ。餌は8分餌に

1) 飼ひ悪い鳥を押し並べて飼鳥家は“難鳥”といふ。飼ひ難い鳥の意であらう。

南京豆1粒の半片を搗り込んだものを與へ、其の他に“袋蟲”^リや地蜘蛛などを1日に5—6疋づつを補給したが、これで結構夏を越させるに成功した。

IX. 餘 談

1931年頃から東京附近で急にオホセッカが捕れ出したといふことは、丁度其の頃から東京市内の盛り場に安値飲屋（酒の店とかお手軽小料理などといふ手合ひの）が雨後の筍の如くに生え出した—オット出来初めたのに起因する。實は今まで一般に露店などで“焼鳥”と赤提灯を下げて賣つてをつたものゝ殆ど總べてが牛豚の内臓の串焼でしかなかつた時に、稍々高級な本物の焼鳥（主としてスズメで其の他にはアラジ・ホホジロ等）が斯ういふ店へ現れ出したから一般に大いに受けたものである。一人の客が假りに1串（2羽づつ刺したのが2串で一人前）づつを喰べたとして小さい店でも1日に先づ100羽位、大きい處では何千羽と出る。斯うなると普通の刈田の中などで無双羅を張つてスズメ捕りをする位では追つ着きはしない。そこで目を附けたのは荒川放水路の蘆荻密生地であつて、霞羅業者は此處で盛んに捕つた。晝網などではスズメ以外の鳥も掛つたので珍らしいものは飼ひ鳥屋に廻はす、丁度この頃はセキセイインコの凋落時代で、捕餌鳥擡頭の氣分濃厚の折でもあつたから日本鳥なら何んでも賣れた。そこに此のオホセッカが偶々引つ掛つたものであつた。この時、業者はオホセッカといふ鳥を初めて識つた譯であるが、初めは其れが如何いふ鳥であるか分らなかつたのを、或る一軒の小鳥屋の許に黒田博士の『鳥類原色大圖説』を持合せて居た爲めに“斯く斯く斯様な珍鳥”といふことが解り、餌付けにも大分に苦心した模様で、兎も角飼ひ鳥に仕立てゝ難鳥飼養家を欣ばした。

オホセッカが急に澤山に獲れ出した理由はザツと斯くの通りである。

X. 文 獻

- 1) Seebohm, Henry : *Megalurus pyeri*, nov. sp. “Further Contributions to the Ornithology of Japan.” Ibis, 1st ser., vol. ii, p. 40, January, 1881. —2) Id. : *Luscinola pryeri*. (Pryer's Grass-Warbler). The Birds of the Japanese Empire, p. 79 1890. —3) Ijima, I. : *Luscinola pryeri*, (Seeb.) Pryer's Grass-Warbler. “Nipponno Tori Mokuroku (List of the Birds of Japan).” 動. 雜, vol. iii, no. 31, 後附 p. 4, 1891. (更に no. 37, に „Zōho & Seigo” として和名を “Osekka” と追補=Oct. 15, 1891). —4) Okada, S. : *Megalurus*, Horsf.,

1) クロスヂキンノメイガ(黒條金野螟蛾) *Sylepta aurantiacolis* Guérin の幼蟲、コナラに發生する。

pryeri, Seeboh. Catalogue of Vertebrated Animals of Japan. p. 140, July 22, 1891. —5) 小川弘太郎: 「大せつか」の標本。博物學雜誌, vol. i, no. 7, pp. 37—38, Dec. 10, 1898. —6) Ogawa, M.: *Luscinola pryeri* (Seeboh.). Osekka. "A Hand-list of the Birds of Japan." Annot. Zool. Japan., vol. vi, pt. 5, p. 394, Dec. 25, 1908. —7) 内田清之助: おほせつか *Luscinola pryeri* (Seeboh.). 『日本鳥類圖説』, II, p. 434, pl. XXVII, fig. 7, 附録 p. 28, Sept. 13, 1914. —8) Hartert, E.: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeb.). Die Vögel der palaarktischen Fauna, III, Heft 3, p. 2142. Nov., 1921. —9) Uchida, S.: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.) Ō-sekka. A Hand-list of the Japanese Birds, p. 133, Nov. 1922. —10) Id.: おほせつか *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). 『日本鳥類圖説』, 2nd & Rev. ed., II, pp. 504—505, pl. XXVII, fig. 7, May 25, 1923. —11) Hachisuka, Masa U.: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). O-sekka. A Comparative Hand-list of the Birds of Japan and the British Isles, p. 25, 1925. (pref. October, 1924). —12) 内田清之助: おほせつか *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). 『日本鳥類圖説』, 4th & Rev. ed., II, p. 457, pl. XXVII, fig. 7, May, 10, 1926. —13) Kumagai, S. (with nomenclature and literature by Toku T. Momiyama): *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). Oh-sekka. "A List of the Birds from Prefecture Miyagi." Annot. Orn. Orient., vol. i, no. 3, p. 275, Dec. 21, 1938. —14) 熊谷三郎: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). オホセツカ. "宮城縣産鳥類に就て, 附小啄木の「新亞種」" *ib.*, pp. 286—289. (此の種發見以來の採集記録を挙げ, 且つ其れ等の標本の所在分明のものに就いて委細を述べてを). —15) Id.: 若柳町附近に於ける鳥獸調査. 鳥獸報告集, vol. vi, no. 11, pp. 169—173 (170), "Jan." = March, 1931. (其の習性から見てオホセツカではない様にも思はれる——穀山). —16) Hachisuka, M. et al.: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.) オホセツカ. A Hand-list of the Japanese Birds, Revised ed., p. 54, Sep. 20, 1932. —17) 黒田長禮: おほせつか【大雪加】 *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.). 『鳥類原色大圖説』, I, pl. XXII, fig. 276, with text (facing page), Oct. 30, 1933. —18) Id.: 日本特有オホセツカの採集記録. 「鳥」, vol. viii, no. 38, pp. 223—228, text figs. 76—77, Apr. 30, 1934. —19) [編輯部]: 大雪加の出現("鳥だより"の1部). 「野鳥」, vol. i, no. 1, p. 63, May 1, 1934. —20) 大野義輝: オホセツカについて. *ib.*, vol. i, no. 7, pp. 712—716, Nov. 1, 1934. —21) Ohfuchi, Shinryo: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeboh.) Ōsekka. "A List of the Birds Collected from North Eastern Honshu, Japan. The First Report; Passeres, Cypseli, Caprimulgi, Halcyones, Pici, and Cuculi." Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletin, no. 3, p. 35, Dec. 15, 1934. —22) Hartert, E. et Steinbacher, Friedrich: *Tribura pryeri pryeri* und *Tribura pryeri sinensis*. Die Vögel der palaarktischen Fauna, Ergänzungsband. Heft 4, p. 260, Januar, 1935. —23) 中西悟堂: 仙臺地方の旅. 「野鳥」, vol. iii, no. 9, p. 727, Sep. 1, 1936. (此の種の蕃殖地(?)を發見したとある). —猪川城: 大雪加の巢を發見して. *ib.*, vol. ii, no. 10, pp. 780—787, 4 text. gps., Oct. 1, 1936. (『野鳥標記』, Dec. 20, 1942.) —25) 竹谷彦藏: 日本特有オホセツカの蕃殖. 仙臺鳥の會々報, no. 7, pp. 1—8, Oct. 8, 1936. —26)

大淵眞龍：オホセツカの蕃殖地をつきとめる迄, *ib.*, pp. 20—24. —27) Id.: オホセツカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm)の生態學的觀察, 『生態學研究』, vol. ii, no. 4, pp. 301—305, text figs. 1—4, Dec. 10, 1936. —28) 安曇惣四郎：宮城縣宮城郡高砂村に於けるオホセツカ蕃殖狀況の觀察, 鳥獸彙報, no. 11, pp. 59—65, photos 9—11, with 1 map. March, 1937. —29) 内田清之助：オホセツカ(*Bradypterus pryeri pryeri*). 『脊椎動物大系, 鳥類』, p. 355, June 15, 1927. —30) Kuroda[黒田長禮]：オホセツカ(*Bradypterus p. pryeri*)の新分布地「鳥」, vol. ix, no. 44, p. 343, June 22, 1937. —31) 竹谷彦藏：(“各地鳥信”の1部). 「野鳥」, vol. iv, no. 7, p. 618, July 1, 1937. —31₂/1) 石澤健夫・下村兼二：オホセツカ(鶯科). 『觀察手引原色野鳥圖』, p. 197, Sep. 1, 1937. —32) 中西悟堂：オホセツカ(大雪加) (Japanese Swamp-Warbler.) *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm). 『野鳥ガイド』, pp. 10 & 42, with fig., March 10, 1938. (Nov. 22, 1940). —33) *黒田長禮：靜岡縣下の二三鳥類に就て. 靜岡縣獵友會報, no. 13, pp. 4—5, Oct. 10, 1937. (Cf. 「鳥」, vol. x, no. 46, p. 60, June 20, 1938. —34) 安曇惣四郎：オホセツカの蕃殖. 鳥獸報告集, vol. xii, nos. 23—24, p. 57, March, 1948. (蕃殖地の記入がないが蒲生であらう). —35) 竹谷彦藏：蒲生に於ける日本特有オホセツカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm). の蕃殖に就いて. (1). 「野鳥」, vol. v, no. 8, pp. 832—840, 5 text figs., Aug. 1, 1938. (2). *ib.*, vol. v, no. 9, pp. 910—917, 2 text figs., Sep. 1, 1938. (第2の方で前回の表題の誤所が正されて居る). —36) Okada, Yaichi-ro: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm) オホセツカ. A Catalogue of Vertebrates of Japan, p. 47, Oct. 1938. —37) 竹谷彦藏：蒲生草原に於ける鳥類蕃殖異變. 「野鳥」, vol. v, no. 11, pp. 1117—1122, Nov. 1, 1938. —38) 太田春雄：行々子・雪加. “和秋の名古屋の鳥”. *ib.*, p. 1156. (オホセツカの豫想出現地として名古屋市西南部の中川運河西方の濕地帯を指摘して居られる). —39) 下村兼史：オホセツカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm). 『原色野外鳥類圖譜』, pp. 9, 82 & 141, pl. VIII, fig. 13, Dec. 10, 1938. —40) 山階芳麿：オホセツカ(大雪下) *Bradypterus pryeri* (Seeböhm). 『日本の鳥類と其の生態』, II, pp. 131—137, text fig. 8, pl. VII, fig. 1, Jan. 15, 1941. —41) 橘原勉：大雪加らしき鳥. 「野鳥」 vol. vii, no. 11, p. 729, Nov. 1, 1941. —42) Hachisuka et al.: *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm) オホセツカ. A Hand-List of the Japanese Birds, 3rd & Revised ed., p. 60, June 30, 1942. —43) 榎山徳太郎：オホセツカの新分布地, 其の他. 「鳥」, vol. xii, no. 56, pp. 4—5 “December,” = Mar. 10, 1948. —44) 橘川次郎：オホセツカ歟と思はれる鳥. Aves, vol. i, no. 2, p. 24, May 10, 1948. —45) Id.: オオセツカ *Bradypterus pryeri pryeri* (Seeböhm)? “千葉市内に出現した珍鳥” 「鳥獸の生態」, No. 2, p. 51, Feb. 15, 1949.

註一文獻の中の*印を附けた分だけは直接に見ることが出来なかつたものである。

Résumé

A full account of the available data on Pryer's Grass-Warbler, one of the rarest Japanese birds, is given. Between 1884 and 1923, only ten specimens

were procured; during the winter of 1931—32, five were recorded but none were preserved; the following winter some 20—25 were captured and I procured three specimens during the winter of 1936—37 received three live birds, and Kuroda procured one in Spring, 1937. The nesting round was discovered in Sendai the same year. The known localities are confined to six prefectures but most recent specimens have been taken north of Tokyo. This Warbler is partial to reed beds. I think the sudden increase of records in recent years is due to the popularity of roasted small birds sold in Tokyo streets, and to fill this demand netters of small birds started clearing avian population in reed beds along rivers and lakes north of Tokyo, thus many appeared in native bird-dealers. As the exploitation of this Warbler's habitat is fast progressing great havoc is expected to the bird's life. The article deals with history, derivation of name, morphology, affinity, habit, aviculture and bibliography.